



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『聖グレゴリオス講話』伝承史のテキスト学的研究（前編）
Author(s)	三浦, 清美
Citation	スラヴ研究, 44, 37-64
Issue Date	1997-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/40157
Type	departmental bulletin paper
File Information	44_37-64.pdf



『聖グレゴリオス講話』伝承史の テキスト学的研究（前編）

三 浦 清 美

はじめに

本稿の課題は、15世紀の写本文集『ズラタヤ・マチッツァ（金の梁）Златая Матица』に収容されたテキスト『聖グリゴリー講話』の翻刻と、その生成過程をめぐる考察である。本研究は1992年9月から1993年12月まで筆者がサンクト・ペテルブルグ大学に研究生として在籍し、その間に行なった調査がもとになっている。調査研究の内容は1994年東京大学に提出した博士論文の第二章としてまとめられたが、本稿はさらにその後の調査（1996年8月）結果を盛り込み、若干の訂正を施した最新の研究成果である。

本論考は、テキスト学 текстология と呼ばれるスラヴ文献学の有力な一研究分野に属する。

従来資料入手の制約などから、日本においては特別な関心が払われてこなかったが、研究資料の淵源を見極め、他のあらゆる研究の基礎を創るという点で、テキスト学は極めて大きな意義を持っている。テキスト学とは、あるテキスト（作品）につき、種々の写本に集められた様々なヴァリエーションを集め、それらの異同に一字一句厳密な検討を加え、写本に含まれる情報（写本成立年代・場所・状況、保管者、保管場所など）、テキストに含まれる情報（執筆者、執筆年代・場所・状況）、方言などの言語的特徴、テキストの叙述構成など、その他あらゆる要素を比較検討総合したうえでヴァリエーション相互の影響関係を確定し、信頼に足る刊行テキストを作成する仕事である。

上記のように、テキスト学は最も基礎的な仕事であるがゆえに、一見単純な作業の連続に見えるが、内実それには、東西キリスト教会の基本文献や略号を多用する写本表記の煩瑣な規則に精通することはもとより、写本や作品の成立を促した歴史的状況への洞察や中世人の世界観への想像力豊かなアプローチが要請される。テキスト学は研究者の総合的な実力が最も鋭く問われる分野なのである。

テキストの具体的な手続きに関しては、個々のケースに即して考えることが不可欠であり、限られた紙面で説明を施すことは本来不可能である。また、中世ロシア文献の学としてのテキスト研究の経験を集大成したりハチョフによる大著⁽¹⁾も別に存在している。考察の過程で疑問が生じた際、あるいは、テキスト学が何たるかを知ろうとするときには、この書を参照すべきことは言うまでもない。本稿の筆者には方法論について詳述する責は重すぎるのであるが、手続きについて最も基本的な事柄を次に略述したい。

まず、最初の段階はウォーター・マークによる写本成立年代の確定である。この確定方法については本文（ただし、『後篇』）に述べた。写本の成立年代の順は必ずしもテキストの成立年代の順と一致せず、新しい写本に古いテキストが残存するケースも十分に考えら

れる。しかしながら、テキストの成立年代が写本の成立年代よりも新しいことは当然ながらありえないので、テキストの成立年代を考えるうえで写本の成立年代は一つの指標となりうる。

次に行なうべき作業は、テキストの各ヴァリエーションの字句を比較検討することにより、テキストをオリジナル部分と挿入部分に分け、さらに、挿入部分を出来るだけ細かくグループ分けすることである。一概にはいえないが、テキストを構成する層の解析の結果、挿入が何段階にわたって行なわれたかがわかることが多い。

写本成立年代・場所・状況、写本の保管者・保管場所、テキストの執筆者、執筆年代・場所・状況、方言などの言語的特徴、テキストの叙述構成、そして、何よりもその内容など、あらゆる要素の検討を行いながら、最終的にテキスト生成のプロセスを明らかにしてゆくのが研究の最も重要な段階である。テキストの成立過程がある程度明らかになり、テキストの各ヴァリエーション間の影響関係が確かめられたならば、次に、それが写本レベルでも確認されるかどうかを調べなくてはならない。写本間で複数の作品が共有されていれば、写本レベルで影響関係があった可能性が高い。写本レベルでの関与が証明できないならば、両テキストの間に第三の写本が介在したことを想定すべきである。現存しないが想定しうる写本・テキストの存在も含めて、テキスト伝承関係の見取り図を系統樹として示すことがテキスト伝承史研究の最終的な課題である。

以上に述べた手続きは極めて概略的なものに過ぎず、対象とするテキストの性格によってさらに綿密な考察が要求される。

テキスト学は、自然科学の研究に準えれば、応用研究に対する基礎研究にあたると言えるであろう。様々な研究条件が整いつつある今だからこそ、一研究者として基礎研究の成果を問うことを志す日本人研究者が現われてもよいのではないかと思う。行き届かない点も多々あるが、本稿がその試行錯誤の試みの一歩となればと、筆者は念願して止まない。

最後に、本論考の構成について触れておきたい。

本稿は二部構成である。紙面の関係上、本紀要に掲載されているものは前半部分『資料篇』のみである。この前半部では、『聖グレゴリオス講話』プスコフ・ヴァリエントのテキストの確定を主眼として、伝承史をめぐる考察のための資料の提示が行なわれている。より具体的に掲載稿の課題を述べると、1) 写本からテキストを翻刻する、2) 試訳を付す、3) 現存するヴァリエーションを紹介する、4) 本テキストと原典作者との関係を明らかにする、5) 本テキストの特徴を概括する、6) テキスト伝承史を記述する準備作業として研究史を概括する、以上である。

後半部において、私達は様々なヴァリエーションがいかに伝承されてきたかという問題に取り組むことになるが、こちらの方は電気通信大学紀要第9巻2号(平成9年刊行予定)に『理論篇』として掲載される予定である。論文の分量の関係上変則的な掲載となったことを読者諸賢にお詫びすると同時に、『スラヴ研究』編集部のご理解に感謝を表する次第である。

テキストの内容に関するコメンタリーは重要な仕事であり、中世ロシアの民衆文化を大きく視野にいれて現在仕事を進行させているが、紙面の都合のため本研究中にはほとんど反映されていない。なお、本テキストのコメンタリーの一部をなすものとしてまとめた

“ロードとロジャニツァ”という神格に関する論文⁽²⁾は『ロシア民話研究』4号（1996年刊）に掲載されている。

写本一覧

- 1) パイーシイ文集（Паисиев Сборник）キリル・ペロゼルスキー修道院写本コレクション（Собрание Кириллобелозкрского монастыря）写本整理番号 No. 4/1081 14世紀 第40葉表から第43葉裏まで
- 2) ノヴゴロド・ソフィア・コレクション（Новгородское Софийское собрание）写本整理番号 1285番 15世紀 第84葉裏から第87葉表まで
- 3) キリル・ペロゼルスキー修道院写本コレクション 写本整理番号 No. 43/1120 第128葉裏から130葉表まで 16世紀
- 4) НСРК 1946г. 写本整理番号 35/2 F. 文集『ズラタヤ・マチッツァ 金の梁』（Сборник “Златая Матица”）第145葉目表から第148葉目表まで
- 5) チュードフ修道院古写本コレクション（Чудовское собрание）写本整理番号 No. 270 第221葉表から第224葉表まで

5) が国立歴史博物館（在モスクワ）に所蔵されているほかはすべて現在シチェドリ名称ロシア国立図書館（在サンクト・ペテルブルグ）が所蔵している。

このテキストについて

テキスト：ロシア共和国サンクト・ペテルブルグ市ロシア国立図書館所蔵写本整理番号 НСРК 1946г. 35/2 F. 文集『ザラタヤ・マチッツァ（金の梁）』145葉目表から148葉目表まで

本テキストは上記の写本から転写を行ない、パンクチュエーション、文法的な整合性などを考慮したうえで、その確定を行なったものである。対照テキストとして使用したのは以下のもの。本文中に番号を打ってその異同を示した。

対照テキスト：ロシア共和国モスクワ市国立歴史博物館所蔵 写本整理番号 チュードフ修道院古写本コレクション No. 270 221葉表から224葉表まで

凡例

1. 本文中単独の番号は、番号をふった НСРК 中のその単語がチュードフ・コレクションでは脚注の単語であることを意味する。
2. 本文中同一の番号が二つ出てくる場合、即ち、⁵¹мужь, женъ⁵¹ のような場合、二つの番号に挟まれた НСРК 中のその箇所は、チュードフ・コレクション写本では脚注における該当番号の表現となること、例えば、51-51 мужь и женъ となることを示す。
3. 脚注“ДОБ”の印は НСРК 写本にない表現がチュードフ・コレクション写本に存在す

ることを示す。例えば、本文中 же¹⁷⁶・脚注 176 ДОБ то が示すのは、チュードフ写本ではこの же の次に то が来るということである。

4. 脚注 “НЕТ” の印は НСРК 写本にある表現がチュードフ・コレクション写本には存在しないことを示す。例えば、本文中¹¹⁵ роду и¹¹⁵・脚注 115-115 НЕТ が示すのは、チュードフ写本では、НСРК に存在する роду и が存在しないということである。
5. テキスト中、下点線はパイーシイ写本テキストと同じ箇所、下波線は基本的にパイーシイ本テキストと同じだが目に見える変更をこうむった箇所、下実線はパイーシイ本にはないがノヴゴロド本にある箇所、二重傍線は『聖金口イオアネス講話』からの引用。

テキストと試訳

145

Слово с(вя)того Григория¹, изъобретено² въ³ толцѣх⁴ его,
о том⁵, како пѣрвое⁶ погании суще языци⁷ кланялися идолом⁸ и трѣбы⁹ имѣ клали, иже и¹⁰
н(ын)ѣ¹¹ то творять.

Видите¹² ли оканную¹³ сию, и скверную¹⁴ службу створяему¹⁵ от сквѣрныхъ¹⁶ языкъ
еллини¹⁷ оканнии¹⁸, блядивыя жертвы учениемъ¹⁹ дияволемъ²⁰, изъобретѣно²¹
потворениемъ²² тѣмного бѣса. И кощунамъ²³ злымъ²⁴ трѣбы²⁵ кладуть. Зловѣрнии,
мняще суету истинною²⁶, служаще и кланяющесе идоломъ²⁷, некоего²⁸ ухыщрение
бѣсовское²⁹ творяще³⁰. Мы же сихъ, чад³¹, отмещемся нечестивыхъ³² жертвъ,

1 Григорья 2 изобрѣтено 3 в 4 толцѣхъ 5 томъ 6 перв-
ое 7 языцы 8 идоломъ 9 требы 10 НЕТ и 11 ныне 12
Ведите 13 оканную 14 скверную 15 створяемую 16 сквѣрныхъ
17 елини 18 оканнии 19 учениемъ 20 дяволемъ 21 изъобрѣтена
22 потворениемъ 23 кощунамъ 24 ДОБ и 25 требы 26 истинною
27 идоломъ 28 некое 29 бесовское 30 творяще же 31 чада
32 нечестивых

その注釈に見いだされる聖グレゴリオスの説教
かつて諸民族が異教徒であり、偶像を崇拜し、
これに供物を捧げおりたるのみならず、
今もこれを行ないたること

あの呪われ、穢れたる祭式を汝らは見るであろうか。穢れ、呪われたるヘラスの民びと
が悪魔の教唆を得て偽りの捧げものを行なう儀式、闇の悪魔のあやかしによって催される
あの祭りを。邪悪なるでたらめごとに供物が捧げられる。邪悪な教えを奉ずるものたちが、
嘘を真と偽って偶像に勤めを為し、跪拝し、悪魔の思案をどのようなものでも実行に移す。

145 об

диявольска³³ служения и кладения³⁴ жертвъ, критьскаго³⁵ оканнаго³⁶ учителя и Мамеда проклятаго, сорочиньскаго жерца и елиньския³⁷ любви, бубеньнаго³⁸ плескания, свирельни³⁹ звуци, плясания, фружьския слоньница⁴⁰ и гусли, мусикия⁴¹ и замара, иже бѣсятъся⁴² жруще м(а)т(е)ри бѣсовѣстѣи⁴³, Афродити богыни⁴⁴, Корунѣ⁴⁵ и Артѣмидѣ⁴⁶, и проклятѣи⁴⁷ Диомисии⁴⁸, стегноражанию⁴⁹ и недоношенны⁵⁰ породыи, б(ог)ъ⁵¹ мужженъ⁵¹, Афивѣское безумное пьянство⁵² почитаютъ акы б(ог)а. И семелвино требокладение грому и молниямъ, и виламъ⁵³, иже е(сть)⁵⁴ были⁵⁵ змии вилы⁵⁶ нарицаемъ, его же уби Данилъ пророкъ⁵⁷ въ Вавилонѣ. Фили кази же и фюфули, чтуть срамныя уды, и кланяются⁵⁸ имъ, и трѣбы⁵⁹ имъ кладуть. От них же⁶⁰ болгаре научышеся⁶⁰ от срамныхъ удовъ истекшую⁶¹ сквѣрну⁶² вкушаютъ, ркуще⁶³, яко тѣмъ⁶³ вкушениемъ⁶⁴ очищаются⁶⁵ грѣси. Тавръская дѣторезания⁶⁶ идоломъ⁶⁷, еже от пѣрвѣнецъ⁶⁸, ланьская трѣбищная⁶⁹ кровъ⁷⁰, просажается ранами, ею же мажутъ⁷¹ Едакию⁷² б(о)гыню, сию же д(е)ву мнать. И Мокошь чтуть, и Малакию, и Килу

33	дьявольскаго	34	кладение	35	криньскаго	36	оканнаго	37	елиньския
38	бубеньнаго	39	свирельни	40	слоньца	41	замусикия	42	высятся
43	бѣсовѣстѣи	44	богини	45	Коруни	46	Артѣмиди	47	проклятѣи
48	Диомисии	49	стѣгноражанию	50	недошени	51-51	муж и женъ		
52	пьянство	53	вилу	54	есть	55	быль	56	вилъ
57	кланяются	58	требы	59	научышеся болгаре	60	истекшую		
61	скверну	62-63	НЕТ	64	вкушениемъ	65	очищаются	66	дѣлорѣзание
67	идломъ	68	первениць	69	требищная	70	кровъ	71	мажутъ
72	Едакиню								

皆の衆よ、私達はこのように汚らしい供犠から離れようではないか。悪魔に勤めを為し、生贄を捧げることから。クレタの呪われた教師、忌まわしいモハメッド即ちイスラムの祭司、ヘラスの色ごと、太鼓の連打、笛の音、踊り、フリジアの吹奏楽、堅琴、詩の朗唱とザマラから。連中は鬼に憑かれたように乱痴気騒ぎをして悪魔の母アフロディテに、コリュバントに、アルテミスに、忌まわしいディオミディアに生贄を捧げるのだ。腿からの誕生や月足らずの逆子、アンドロギュノス、アテネの常軌を逸したばか騒ぎを神のように崇めることから。雷や稲妻に、ヴィールに、セメラの捧げものを供えることから離れようではないか。予言者ダニールがヴァヴィロンで殺した蛇をヴィールと名付けている。ファロスや堅く張りつめたファロスを崇拜することから離れようではないか。人々は恥部を崇め、それに跪拝し、供物を捧げている。恥部から流れ出る液を食することによって罪が清められると言いながら、この嘘の教えを信じて、彼らは恥部から流れ出る液を食するのである。タブリスで偶像に捧げる子供の生贄。最初の子供から屠るのである。スパルタの血の供犠。切り裂いて流した血を女神エダキヤに塗り付ける。このエダキヤは乙女であると考えられている。そして、モコシとマラキアを崇拜している。

補注：фружъскыяはフリュギアに由来する語。フリュギアはギリシア語の *φρύγες*、ラテン語の *francus* に由来（Словарь Современного Русского Литературного Языка, Т.16）し、元来フランク人という意味であったが、ビザンツの例に習い（p. 211、ロシア史 1、東京、1995）、イタリア人を指した。ことに、ジェノア人に用いられたが、後に西欧人一般をこう呼ぶようになる（Полный Церковно-славянский словарь, М., 1899）。本稿では、しかしながら、原典が *φρυγῶν* (*φρύξ*) = Phrygians となっているので、あえて「フリジアの」という訳をとった。写字生の取り違えによるテキストの変容の一例と言えよう。

146

вѣльми⁷³ почитаютъ, рекущи⁷⁴ “Буякини⁷⁵”. Пѣлепово⁷⁶ тѣмное⁷⁷ мясосътворение⁷⁸, им же насыщая б(о)гы, творя алчны⁷⁹, ли трипода Делфичьскаго⁸⁰ ворожа⁸¹, Ликално⁸² запоиство, волхвование⁸³, волшьбнаа⁸⁴ проповѣдь и наузи смраднии, и халдѣйская острономия, и родъпочитание⁸⁵, и фрачьскыя⁸⁶ сны, и чары, и усряща, и кошь⁸⁷, Еврѣловуѣ⁸⁸ и⁸⁹ сквѣрныя⁹⁰ басни и кощуны⁹¹, Митрофана мукаворожа. Нарица правѣдная⁹² проклятого⁹³ Осирида рождение, м(а)ти бо его⁹⁴ ражаючи оказися⁹⁵; и того створиша б(о)г(о)мъ, и трѣбу⁹⁶ ему творяху оканнии⁹⁷. От тѣх же древлѣ⁹⁸ извыкъше⁹⁹ халдѣи, начаша творити трѣбы¹⁰⁰ вѣлики¹⁰¹: роду и рожаницамъ, пороженію¹⁰² проклятого и сквѣрнаго¹⁰³ б(о)га Осирида. Того же Осирида скажутъ¹⁰⁴ книги сорочиньскыя, яко нелѣпымъ¹⁰⁵ проходомъ проиде смердящимъ¹⁰⁶, и туда родишася сорочина¹⁰⁷, и того ради сорочины¹⁰⁸ мьютъ¹⁰⁹ оходы, и болгаре, и торкъмене¹¹⁰, и обези¹¹¹, и комли, оттуда же извыкоша¹¹² еллини¹¹³ класти трѣбы¹¹⁴ Роду¹¹⁵ и рожаницамъ, таче египтяне, таче римлянѣ¹¹⁶, то же и до словенъ доиде. Се же словени начаша трѣбы¹¹⁷ класти роду и рожаницамъ, Перуна б(о)га ихъ, а преже того клали уpiresь

73	вѣлми	74	рекуще	75	буякини	76	нипелепову	77	темное
78	мясотворение	79	алчны	80	делфического	81	Върожа		
82-82	и калнозаиств	83	вольхвование	84	волшебная	85	читание		
86	фрачьскыя	87	кошь	88	еврѣиловы	89	НЕТ	90	сквернены
91	кощоны	92	праведная	93	проклятого	94	НЕТ	95	требы
96	требы	97	оканнии	98	древле	99	извыкше	100	требы
101	велики	102	положьню	103	скверненаго	104	скажутъ		
105	нелѣпым	106	смердящим	107	сорочина	108	сорочина		
109	мьютъ	110	търкме	111	обизи	112	изъвыкоша	113	елини
114	требы	115-115	НЕТ	116	римляне	117	требы		

「氣性が荒い」と言ってキラを大変に深く崇拜している。罪深いペロプスの肉切り。神々が空腹だと言ってこの肉で神々の餓えを満たすのである。デルフォイの魔術の鼎、カスタリの泉を飲むこと、幻術、魔法の説法、けがらわしい邪視、カルディアの占星術、祖先崇拜、フリジアの夢占い、魔法、籤、オルフェウス運命占いとけがらわしいお喋りと作り事、ミトロファンの妖術を捨てなくてはならない。オシリスを生んだ母親がちゃんといるので

からという理由で、呪われたオシリスの誕生を本当のことだと信じている。そして、オシリスを神と見做し、呪われた人々は大いに供物を捧げている。大昔カルディア人たちからギリシア人たちは習い覚えて、けがらわしく呪うべきオシリス神の誕生をまつり、ロードとロジャニツァに大いなる捧げ物をするようになったのである。このオシリスについてサラセンの本には次のように書かれている。汚いところを通ってくさい臭いがつく。そこからサラセン人は生まれてくるのでかれらは女性の陰部を洗うのだと。ボルガル人、トルクメン人、オブハジア人がまずこれにならい、ギリシア人が彼らからロードとロジャニツァに捧げ物をすることを学んだのである。それから、エジプト人、それから、ローマ人に伝わり、スロヴェネ人にも達した。スロヴェネ人はロードとロジャニツァに捧げ物をあげ始めた。また、彼らの神ペルーンにも捧げ物をあげた。それ以前にはウプイリやベレギニャに捧げ物を捧げていた。

146 об

требы и берегынямъ. По с(вя)томъ кр(е)щ(з)нии Пѣруна¹¹⁸ извъергоша¹¹⁹, а по Х(рист)а Б(ог)а яшася, но и н(ы)не по украинамъ молятся¹²⁰ ему, проклятому б(ог)у Перуну, Хорсу, Мокоши, виламъ, и то творять отан, сего же не могутъ¹²¹ ся лишити проклятого¹²² ставлѣния¹²³ вторыя тряпѣзу¹²⁴ Роду¹²⁵, рожаницамъ на великую прѣлѣсть¹²⁶ вѣрнымъ хр(и)стіяномъ¹²⁷, а¹²⁸ на х(у)лу с(вя)тому кр(е)щ(е)нию и на гнѣв Б(ог)у. Вѣрують упиремъ¹²⁹ и млад(е)нци знадбають¹³⁰ м(е)ртвы, и берегынямъ¹³¹, их же нарицають сѣдмь сестрениць, а друзии вѣрують въ Сварожица¹³², Артемида и Артемидию, имъ¹³³ же ч(е)л(ове)ци невѣлѣгласи¹³⁴ молятся¹³⁵ и куры имъ рѣжуть и то блутивше тоже сами ядятъ. О убогыя кокоши, яже не на ч(е)сть с(вя)тымъ¹³⁶ породистеся, ни¹³⁷ на ч(е)сть вѣрнымъ¹³⁸ ч(е)л(ове)комъ! О убогая курята, яже на жертву идоломъ рѣжуться¹³⁹, инии во¹⁴⁰ водахъ¹⁴¹ потопляеми¹⁴² суть, а инии ко¹⁴³ кладяземъ¹⁴⁴ приносяще молятся¹⁴⁵ и въ¹⁴⁶ воду мѣчють¹⁴⁷, Вѣлѣару¹⁴⁸ жертву приносяще. А друзии под¹⁴⁹ овиномъ и въ¹⁵⁰ повѣтѣхъ¹⁵¹ скотнихъ¹⁵² молятся¹⁵³, акы¹⁵⁴ погании, ¹⁵⁵а инии и требами¹⁵⁵ мерзѣкыми¹⁵⁶ молятся¹⁵⁷ блутивше, а инии пють¹⁵⁸ куски и ростѣкы лукавыми¹⁵⁹, и Кутну б(ог)у,

118 Перуна 119 извъергоша 120 молятся 121 мугут 122 проклятаго
123 ставления 124 тряпезы 125 ДОБ и 126 прелестъ
127 кр(е)стіяномъ 128 ДОБ и 129 упирем 130 знаменають
131 берегенамъ 132 Сварожитьца, и 133 им 134 невелгласи
135 молятся 136 святымъ 137 не 138 вѣрным 139 рѣжются
140 въ 141 водах 142 потапляеми 143 къ 144 кладеземъ
145 молятся 146 в 147 мечють 148 Велеаху 149 подъ 150 в
151 повѣтѣхъ 152 скотѣях 153 молятся 154 акы 155-155 а инии
требами 156 мерзѣкми 157 молятся 158 пють
159 луковыми

聖なるキリスト教の洗礼を受けたのち、ペルーンは放逐され、人々は神キリストを信じはじめたが、しかし今に至るまで辺境では呪われた神ペルーン、ホルス、モコシ、ヴィーラどもに祈りを捧げている。しかも、これを密に行なうのである。同じようにロードとロジャニツァに第二祭壇を設けることをやめようとせず、敬虔なキリスト教徒を大ペテンにかけ、聖なる洗礼に侮辱を与え、神の怒りをかき立てている。ウプイリを信じ、赤子が(生きているのに)死んだというふりをしてみたり、七人姉妹と名前を付けてベレギニャを信じている。また、スヴァロジッチを信じるもの、アルテミドとアルテミジアを信じるものがある。アルテミドとアルテミジアに人々は小声で祈りを唱えたり、鶏を潰したり、血迷ったものは自分が食べたりしている。おお、かわいそうな鶏よ、汝は聖者たちの御ために生まれたのでもなく、敬虔なる人々のために生まれたのでもない。おお、かわいそうな鶏よ、偶像への贄となるため汝は切り殺される。水の中に沈められてしまう鶏もいる。井戸端に引っ張って来て祈りを捧げた後、鶏を水中にほうり込む輩もいる。ヴェレアルに生贄を捧げるものもいる。穀物小屋や家畜小屋の軒下で異教徒のように祈りをあげるものもいる。血迷っていやらしい供物を捧げるものがある。葱の塊や汁を飲むものがある。

147

и Бѣлѣ¹⁶⁰ б(о)гыни, и Ядрею¹⁶¹, и Обилухѣ, и скотну б(ог)у, и попутнику, и лѣсну б(ог)у, и спорынямъ¹⁶², и Спѣху. Аки безаконнии¹⁶³ еллини¹⁶⁴ и халдѣи многомъ б(о)гомъ молятся¹⁶⁵, они бо не знающе¹⁶⁶ Б(ог)а, се творять, а си не токмо Б(о)га знающе¹⁶⁷, но¹⁶⁸ и хр(и)стьяне¹⁶⁹ ся нарицающе, а горши поганыхъ¹⁷⁰ суще дѣла творяще, да тѣмъ горше ихъ и¹⁷¹ муку примуть. А друзии огнѣви¹⁷² и камѣнию¹⁷³, и рѣкамъ, и источником¹⁷⁴. Не токмо¹⁷⁵ же¹⁷⁶ въ¹⁷⁷ поганьстве¹⁷⁸ то творяху, но и мнози н(ы)нѣ то¹⁷⁹ творять, хр(и)стьяне¹⁸⁰ ся нарицающеся¹⁸¹, дела сотонина творящи¹⁸². Мостъ¹⁸³ сщиятъ¹⁸⁴ по м(е)ртвых, и просвѣты, и бдѣльникъ, и биричемъ¹⁸⁵ играютъ, и шахы, и лѣйки¹⁸⁶, и тавлѣи. И чересъ огнь скачють, коли громъ грѣмить¹⁸⁷, и воду къ кутии¹⁸⁸ заупокоинѣи¹⁸⁹ ставятъ на столци, и¹⁹⁰ смѣтия¹⁹¹ у воротъ¹⁹² жгутъ въ¹⁹³ вѣликии¹⁹⁴ четвертокъ¹⁹⁵, молвяще¹⁹⁶ тако: “У того огня душа¹⁹⁷ приходяще огрѣваются¹⁹⁸.” Мнящиеся хр(и)стьяне¹⁹⁹, а поганьская дѣла творяще: навѣмъ²⁰⁰ мовъ творяще²⁰⁰, и пепеломъ²⁰¹ посрѣдѣ²⁰² сыплють, проповѣдаютъ мяса, молоко, масло и²⁰³ яица, и вся потребная бѣсомъ, на пѣшь²⁰⁴ лють мытися имъ творяще,

160	Велѣ	161	Ядрѣю	162	спорынями	163	безаконнии	164	елени
165	молятся	166	знающеи	167	знающъ	168	нѣ	169	кр(е)стьяне
170	поганых	171	НЕТ	172	огневи	173	камению	174	источникомъ
175	токмо	176	ДОБ то	177	въ	178	поганьствѣ	179	НЕТ
180	кр(е)стьяне	181	нарицающе, а	182	творять	183	мосты		
184	чинять	185	биричемъ	186	лѣкы	187	гримить	188	кутыи
189	Заупоинѣи	190	НЕТ	191	сметѣ	192	воротъ	193	в
194	великои	195	четвергъ	196	молвящ	197	дша	198	огрѣваются

199 кр(е)стьяне 200-200 НЕТ 201 попеломъ 202 посрѣд 203 НЕТ
204 печь

クトン、ベリャ、ヤドレイ、オビルハ、家畜の神、道祖神、森の神、スポレイニやस्पे
プに祈りを捧げるものもいる。無法なギリシア人やカルディア人たちのようにたくさんの
神々に祈っているのだが、それは彼らがただ御一方なる神を知らないがゆえにそうするの
である。しかし、この人たちはその神を知っているばかりか自分たちをキリスト教徒だと
名乗っている。これは異教徒よりひどいことをしているのである。だから、そのことによ
って異教徒よりもひどい苦しみを受けることになる。火や石や川や泉に祈るものもいる。
異教時代にそうしていたばかりではなく、今に至るまで多くの人がそのようなことをし
てキリスト教徒だと名乗っている。悪魔の所業を行なっている。死者のために橋を作る。プ
ロスヴェト、ブデリニク、ビリチ、将棋、レイキ、さいころ遊びをして遊ぶ。雷が鳴ると
きに火を飛び越える。故人に捧げる蜜飯に添えて水を卓に捧げる。木曜大祭の日に「この
火にあたって、やってきた魂が暖を取るのだ」と言って門のかたわらで屑を燃やす。キリ
スト教徒だと思い込んでいるが、異教徒の振る舞いをしている。死者のために風呂をたく。
真ん中に灰を振り掛け、肉や牛乳や油や卵、鬼が必要とするすべてのものの在りかを教え
る。

147 об

челхы²⁰⁵ и убрusy²⁰⁶ у мовници²⁰⁷ вѣшають, мывшеся цѣлуютъ пѣреть²⁰⁸ и кланяются²⁰⁹.
Беси же, злоумию²¹⁰ ихъ²¹¹ смѣющися²¹², пороплются²¹³ въ²¹⁴ пѣпелѣ²¹⁵ томъ и слѣды
своя²¹⁶ показывають²¹⁶ на прельщение²¹⁷ имъ²¹⁸. От них же, видѣвшие то, отходятъ
повѣдающе другъ другу, и то все приповѣданое²¹⁹ сами ядятъ и пнютъ, их же не достоитъ
ни псомъ ясти. О злая днаволя²²⁰ прелѣсть²²¹, иже ни поганини того не творять, что
хр(и)стьяне²²² творять! Дружини²²³ вѣрують въ Стриб(ог)а и Дажь(бо)га, Переплута,
иже вѣртячеся²²⁴ пнютъ ему в розѣ. А иньи²²⁶ вѣрують въ сны, въ кошь, въ
устрячу²²⁸, въ уроки, въ²²⁹ ворожу²³⁰, въ кобление, и наузы носятъ, и на дѣти вяжутъ²³¹,
и ногти обрезавши²³² блюдутъ²³³, и въ²³⁴ кадъ, и уголь мечють²³⁵, забывше Б(ог)а,
створшаго небо и землю, море²³⁶ и реки, источники, и тако веселящеся о дѣлѣхъ²³⁷
своихъ, не помняще слова реченнаго²³⁸: “С(о)лнце сияетъ на²³⁹ правѣдныя²³⁹ и на²⁴⁰
грѣшныя²⁴¹. Дожь²⁴² идетъ на правѣдныя и на грѣшныя²⁴².” Паки²⁴³ же еще и се:
египтянѣ²⁴⁴ неч(и)стыя²⁴⁵ требы кладуть

205 чехлы 206 убрusy 207 мѣвнициѣ 208 пѣреть 209 кланяются
210 злоумью 211 их 212 смѣющеся 213 порѣпрютъся 214 в
215 попеле 216-216 показаютъ, имъ 217 прельщение 218 НЕТ
219 проповѣданое 220 дѣяволя 221 прелестъ 222 кр(е)стьяне
223 дружини 224 вершячеся 225 ДОБ и 226 инии 227 ДОБ и
228 устрячу 229 НЕТ 230 ворожу 231 вяжутъ 232 обрѣзавше

233 кладуть 234 въ 235 мецють 236 моря 237 дѣлех
 238 реч(е)наго 239–239 и не на праведныя 240 НЕТ 241 грѣшныя
 242–242 Нет 243 Пак(ы) 244 егуптяне 245 неч(и)стыя

暖炉に鬼たちを洗い清めるのだと言って水を流し込む。手洗い器のわきに布や手拭いをかける。手を洗いながら、その布の切れ端に接吻をし、跪拝する。悪魔たちは彼らの悪巧みに大喜びし、灰の中で転げ回り、彼らを嬉しがらせるためにその痕を見せてやる。これを見て、人々は互いにお喋りをしながら立ち去り、先に（鬼に）在りかを教えたものを食べたり、飲んだりするが、そのようなものは犬も食うほどの値打ちがない。何という悪魔の誘惑であろうか。異教徒でさえそんなことをしはしない。しかもキリスト教徒がそれをやっているのだ。ストリーボグやダージボグ、ペレプルトを信じる者がいる。ペレプルトのためにくるくる回りながら角の杯で酒を飲むのである。夢占い、運命、辻占、命数、魔法、ト占を信じる者、守り帯を締める者、それを子供に結び付ける者、切った爪をしまっておく者、桶にいれる者、足の爪を頭に置く者などがいる。そして、ビールを煮て釜に塩を振りかける。炭を投げる。天と地、海と川そして泉を創った神を忘れてしているのである。「太陽の光は正しい者の上にも、罪深い者の上にも、降り注ぐ。雨は正しい者の上にも、罪深い者の上にも、降り注ぐ。」と言われている言葉を忘れて、自分の所業に大喜びしているのである。

148

Вилу²⁴⁶ и огневи²⁴⁷, рекуще: “Нилъ плододавецъ и раститель класомъ,” а²⁴⁸ огонь творя²⁴⁹, то²⁵⁰ рекуще, спорниоу суша, егда зрѣть. Сего ради оканнии²⁵¹ полуднь чють и кланяются на²⁵² полъдне обратившеся²⁵³. А сѣ²⁵⁴ иная злоба въ хр(и)стианѣхъ²⁵⁵: ножемъ²⁵⁶ кр(е)стьятъ хлѣбъ, или²⁵⁷ пиюще²⁵⁸ и пиво, кр(е)стьятъ чашею²⁵⁸, или²⁵⁹ иным чимъ²⁵⁹, а сѣ²⁶⁰ поганьскы творять, смокочють къ²⁶¹ пиву или къ меду, а сѣ²⁶² поганьская жертва. Оже что прокынется²⁶³ или пролиетъся²⁶⁴, то они припадше на колѣнѣхъ²⁶⁵ акы²⁶⁷ пси пиятъ, или воду, а сѣ²⁶⁸ поганьска²⁶⁹ творятъ²⁷⁰. Водять невѣсту на воду, даюче замужъ, и чашу²⁷¹ пиятъ²⁷² бѣсомъ, и колча²⁷³ мѣчють во²⁷⁴ воду.²⁷⁵

246 Нилу 247 огнѣви 248 и 249 творять 250 НЕТ
 251 оканнии 252 НЕТ 253 обратившес(я) 254 се 255 кр(е)стьянех
 256 ножемъ 257 а 258–258 пиво кр(е)стьятъ чашею 259–259 ил инымъ
 чимъ 260 се 261 к 262 се 263 прокынется 264 прольется
 265 колѣнех 266 акы 267 пиятъ 268 се
 269 поганьскы 270 творять 271 чашю 272 пиятъ 273 кольца
 274 в 275 ДОБ и поясы. О злое дѣло кр(е)стьяном, се творити, оставльше бога давшего намъ всяко обилѣе от земныхъ плодовъ. Мы же оставльше живодавца къ дьяволу бѣжимъ и того волю творимъ, а и дѣла его дѣлаемъ, иже не хочеть никому же спасения, но съ собою хочеть въ дно адово въвести. Апостоль рече: “Сбираеши собе гнѣвъ въ

день гнѣва и явления праведнаго суда Божия, еже отдасть комуждо по дѣломъ его”. Богу же нашему слава. Си же повѣсть велика, но мы лѣности ради написахом мало.

まだこんなことがある。エジプト人たちは「ナイルよ、汝産みの神にして穀物の育て主」と言ってけがらわしい供物をヴィールと炎に捧げる。一方、穀物が実ったときに炎を灯してスポリニャに同じく捧げ物をする。このために呪われた者たちは南を敬い、南を向いて跪拝するのである。ナイフでパンに十字を切ったり、ビールを飲むとき杯やその他の物で十字を切るが、それは異教徒の振る舞いなのだ。ちゅうちゅう音を立ててビールを飲んだり、蜜を吸ったりするが、これは異教式の供犠なのだ。何か落としたり、こぼしたりすると、犬のように這いつくばって水だろうと何だろうと飲んでしまうが、異教の振る舞いである。嫁にやるとき花嫁を水のあるところに連れてゆき、鬼の為に杯を開け、指輪を水の中に投げ込む。

テキスト解題

本研究でテキスト翻刻の対象となったテキストは『聖グレゴリオス講話』のプスコフ・ヴァリエントである。本稿でテキストの表題とした『聖グレゴリオス講話』は便宜上の略称であり、正式には『その注釈に見いだされる聖グレゴリオスの説教 最初の異教徒たちが偶像を崇拜し、これに供物を捧げおりたるのみならず、今もこれを行ないたること』という長い題名がついている。

その題名に冠せられた聖グレゴリオスとは、言うまでもなく、カッパドキア三教父の一人（ほかに大バシレオス、ニュッサのグレゴリオス）、キリスト教典礼、特に三位一体の教義の確立に力を尽くした聖グレゴリオス・ナジアンゾス・テオロギスである。カッパドキア南西部のナジアンゾスの司教を父に持つ彼は、パレスチナのカイサレア、アレクサンドリア、アテナで哲学と弁論術を学んだのち洗礼を受けた。子の神性を認めないエウノミオス派や聖霊の神性を認めないマケドニオス派に対して、一貫してニケーア信条の立場を擁護し、コンスタンチノポリス公会議を主導する役割を果たした。彼に冠される「テオロギス」という名前は、三位一体を観想した者、その教義の確立に寄与した碩学を指す尊称である⁽³⁾。

鋭い弁証法的議論と流麗な聖書の引用を交えて雄弁に三位一体を擁護した第27-31番講話は『神学講話』とも呼ばれ、その代表的作品として有名であるが、そのほかにも、244通に及ぶ『書簡集』、400篇が現存する『詩集』、司教の職務から教会の祝日や葬儀などの機会に行なった都合45篇の『講話』がある。本研究の対象となるテキストの原典とおぼしき作品も、上記45篇の『講話』中39番目に見いだされる。『主顕節の聖なる光の中で』がそれである。

『講話』のうちかなりの部分が聖グレゴリオスのコンスタンチノーブル司教在任期（379年から381年まで）に書かれているが、この『第39講話 主顕節の聖なる光の中で』も彼のコンスタンチノーブル時代の所産で381年1月6日⁽⁴⁾主顕節の説教として書かれたと考えられている。主顕節を迎える喜びが主題であるが、このテーマは、しかしながら、驚

くべきことに、私達が研究の対象とするテキスト、中世ロシアに移植された『聖グリゴリー講話』とはほとんど接点を持たない。

原典、即ち聖グレゴリオスの『第39講話』の中で、中世ロシアに移植された『聖グリゴリー講話』と重なり合う部分はその四分の一に過ぎず、しかもギリシア神話の様々なモチーフが列挙され、取るに足らないものとして退けられる箇所のみであり、講話の主題そのものとは直接関係がない。実は、中世ロシア版ではどのヴァリエーションでもそもそも主眼節についてさえ触れられることがないのである。しかも、取り上げられたギリシア神話のモチーフは中世ロシア版ではことごとく曲解されていると言っても過言ではない。

原典が『第39講話』であることを確認したのは19世紀後半のスラヴィストたちであるが、今一度その原典との突き合わせを行なってみると、原典と中世ロシア版テキストの間に内容的な符合はほとんどないことがわかる。影響関係の痕跡を見つけることさえ難しい。

つまり、両者を比較すれば、即座に次のような事実が浮かび上がってくるのである。千年にわたるテキスト伝承の過程にはいずこかに大きな断絶があり（どこに断絶があったかは後に触れる）、聖グレゴリオスの手になる原テキストは著しい改変を被り、私達のテキストの中にかれの精神活動の痕跡を認めるのが極めて難しくなった。このことは次のように言い直すことができよう。様々な時代に様々な地域で筆写を行なった人々が、キリストへの信仰を暖め続ける過程で兆した様々な問題をこのテキストに投影し続けた結果、それは独自の護教意識に裏打ちされた別個の新しい作品として新たな誕生を見たのである。

逆に、中世ロシア版『聖グレゴリオス講話』の側から見れば、次のようにも言えるであろう。グリゴリー・ボゴスロフという名はキリスト教典礼の確立に力をつくした大権威という意味しか持っていない。実際の作者は、このテキストがプスコフに至るまで遍歴を続けた各々の地で筆写を行なった写字生であり、かれらが土地の異教的な風習をテキストの中に書き加え、論難の対象とした結果、その誤解や理解不足によってテキストの内容はますます聖グレゴリオスの原典から遠ざかり、注意深く読んでも意味を解しかねる箇所さえ出てきたのである。

こうした挿入や誤解などによるテキストの変容は、『グレゴリオス講話』というテキストの重要な特徴なので、具体的な例を以下に引用しながら検討を行なってゆきたいと思う。

『聖グレゴリオス講話』に質的な変化を強いたテキストの改変の典型的な例として、第一に挙げることが出来るのは、“イスラム”や“ヴィール（あるいはヴィーラ）”に関する記述である。

ヴィーラと言えば南スラヴの妖精を指すのが普通である。ヴィーラは、髪を振り乱し、翼を持ち、魔法の衣装をまとう若い女性の姿をしているとされるが、ここでは次のように書かれている。「予言者ダニエルがバビロンで殺した蛇をヴィーラと名付けている。」若い女性の姿形をとった妖精は『講話』の作者によって「予言者ダニエルがバビロンで殺した蛇」と捉えられている。これは誤解としてもあまりに不自然であるといえないだろうか。

実はこの記述には写字生たちによる混同が幾重にも隠されているのである。

テキストには予言者ダニエルの名前が現われている。まず、このあたりから探ってみよう。ダニエルに関する外典物語群の中にダニエルが知恵によって異教神ベルと竜を打ち砕く話がある⁽⁵⁾。

食欲が旺盛だ（捧げものをするとう食物が消える）という理由でベル神が生きた神であると主張するペルシア王キュロスに対して、ダニエルは「あれは内側は粘土で、外側は青銅でできていて、飲み食いするわけがございません」と答える。王はダニエルの言うことが正しいかどうかを試す。ダニエルが正しいければベル神の司祭たちが、ダニエルが自分の言明の正しさを証明できなければダニエルが死を賜ることになる。ダニエルは神殿に灰をまき、夜司祭たちと家族が忍び込んで捧げものを食べていることを暴く。ベル神の司祭たちは家族もろとも殺され、ベル神の神殿はこぼたれる。

また、あるときダニエルは王にバビロニア人たちが崇めている竜をなぜ神と認めぬかを問われる。かれは一笑に付し、「剣も棍棒も用いずに」竜を殺すことを王に約束する。ダニエルは「ピッチと油脂と毛髪を取り、一緒に煮てだんごを作り、竜の口に入れた。竜はそれを飲み込むや否や体が裂けた。」

以上二つの話は、ダニエルがライオンの洞窟に投げ込まれるが無事に帰還するという筋の話とともに伝えられているアポクリファである。テキストにおいて「預言者ダニエルがバビロンで殺した蛇」とあるのは、これらアポクリファを踏まえている。テキストの「ヴィール」はベル神のことである。ところが、ダニエル記外典に当たれば一目瞭然であるが、ダニエルは確かにヴィール（ベル神）と蛇の両方を退治しているものの、両者は各々別物である。即ちヴィール（ベル神）は蛇ではない。この経緯は2）写本のみが正確に伝えている⁽³⁾。

アポクリファにおいてダニエルが倒したベル神と蛇が、テキストの作者によって内容的に混同されて同一視され、その上さらに、名称の音声上の類似から南スラヴ固有の妖精ヴィーラとも同一視されることになったと考えられる。

次に、イスラムについての言及であるが、現代の我々から見るとそれらはやはり珍奇なものと映る。

まず第一に、モハメッドはイスラムの司祭 жрец と呼ばれているが、周知のように、イスラム教においてモハメッドは言うまでもなく最大にして最後の預言者である。イスラム教を奉じる人々が、マホメットが異教司祭を指す жрец という言葉で呼ばれているのを聞けば、冒瀆だと捉えることは間違いがない。このテキストでは、故意の貶しめがなされているのである。

さらに、『講話』の中でイスラムの名前が出てくる箇所がもう一つある。エジプト神話のオシリスに関する言及⁽⁶⁾ であるが、それは次のようなものである。「このオシリスについてサラセンの本には次のように書かれている。汚いところを通して臭い匂いがつく。そこからサラセン人は生まれてくるのでサラセン女は陰部を洗うのだ。」

ヴィールに関する記述、モハメッドやイスラムの奇習（と、このテキストの作者が考えている）についての記述は、少なくとも、4世紀の聖者が知るはずもないことであり、現にこの原典に当たると考えられている『聖グレゴリオス講話第39話 神の光のなかへ』⁽⁷⁾ にはこうした記述は見当たらない。これは間違いなく後代の挿入である。また、次のケースは原典が原作者（聖グレゴリオス）の意図とは微妙にずれて受容された例として興味をそそる。

ナイル河に関する言及は、原典と原典を非常に正確に反映した南スラヴ語訳では「ナイ

ル河が実りをもたらしてくれるからと言って、穀物の実りをもたらすものとナイルを賛美してナイルを貶しめてはいけない」となっており、その文言には古代民衆のナイル崇拜の根深さに対する聖グレゴリオスの慎重な配慮が感じられる。これに対して、本『講話』では「エジプト人たちは『実りをもたらすナイルよ、穀物の育ての主』と唱えて、ナイル河に捧げ物をする」と、エジプト人たちと捧げ物をする風習に対する非難へと、論難の主旨が変わっている。本『講話』のなかで繰り返し論難の対象となっているのは、偶像に対する捧げ物であるから、上記のナイルに関する言及は、北東ルーシのキリスト教聖職者の問題意識によってテキストが変容を被った一つの例と言える。

同様の例のなかでさらに面白いものとして次のようなものを挙げる事が出来る。

本『講話』テキストの中に「モコシとマラキアを崇拜している」という箇所がある。スラヴ人の神格モコシと並べられている以上、マラキアも同様に神格と捉えられたと判断できるが、この部分はギリシア語原典では「優雅さを重んじている」ほどの意味である。これは写字生らの奔放な解釈によって本来のテキストが内容的な改変を被っているわけである。ここでは、優雅さという抽象概念が神格におき変わってしまっている。

さらに、この部分はギリシア語原典と南スラヴ語訳では次のように書かれている。“снже бо и малакию чтоша и буесть почтоша” “Οἱ γὰρ αὐτοὶ καὶ μαλακίαν ἐτίμησαν καὶ θρᾶσύνητα ἐσεβάσθησαν” 「墮弱を重んじ、向こう見ずたることを尊んでいる。」これが、我々のテキストでは次のようになる。“И Мокошь чтуть, и Малакию, Килу вѣльми почитают, рекущи ‘Буюкыни’” 「モコシとマラキアを崇め、『ブヤキニ』と言ってキラを大変深く崇敬している。」問題は“Буюкыни”なる語の解釈であり、『11-14世紀古代ロシア語辞典（Словарь древнерусского языка (= XI-XIV)）』に至っては不明として語義の深求を放棄している。“Буюкыни”なる言葉がこの文献にしか見いだされない以上、古代ロシア語のコンテキストから見てこの判断は確かに妥当なことと言える。

しかし、原典並びに南スラヴ語訳に当れば、この語が *θρᾶσύνης* = буесть 「向こう見ずであること」に対応することがわかったはずである。古代ロシア語では通常 буйный, буйакがそれに当たる。我々のテキストの作者は恐らく南スラヴ語訳テキストの解釈に苦しみ、前出のマラキアを神格と解釈したことに引き擦られて、「向こう見ずであること」を尊崇の対象とは考えず、別の神格キラ（写本1）を除くすべての写本にこの語が存在するが、この語が何に由来するのかは全くの謎である）が崇拜される理由と解釈したのであろう。

因みに、以上の比較から、テキストの伝承史における断絶は南スラヴ語による翻訳と中世ロシアの諸ヴァリエーションの間に生じていることが明らかである。北東ルーシにおいてテキストは、写字生たちの奔放な自己解釈により変貌を遂げたのである。

こうした自己解釈によるテキストの変容が最も著しいケースとして、「アルテミドとアルテミジア」という神格が挙げられる。アルテミジアがアルテミスを示すことは明らかであろうが、アルテミドなる神格はそもそも存在しない。このことを私達はどうか考えたらいいのだろうか。

北東ルーシ民衆は「ロードとロジャニツァ」を信仰していた。この「ロードとロジャニツァ」信仰を『講話』の作者が異教神話の典型であるギリシア神話の概念で理解しようとした結果、おそらくはギリシアの神々についての知識を中世の写字生が十分に持って

いなかったため、アルテミドなる神格が案出されたのであろう。

アルテミスは多産・出産の守り手としても崇拜されていたから、北東ルーシではこれと同じ役割を果たしていたロジャニツァと同一視され、ロジャニツァは対応する男性の神格ロードと常にペアを作っていたため、アルテミジア（アルテミス）があるならばロード神にあたるアルテミドもあるはずだと作者が考え、実際には存在すべくもない神格がしるされたのであろう。

以上に、ギリシア語原典とルーシにおいて成立したテキストとの主なる相違点を述べてきたわけであるが、翻って次のように問いかけたい。ギリシア語原典と後世の改作を結ぶものは全くないのであろうか。写字生たちが聖グレゴリオスを拠り所とした理由を、キリスト教典礼確立に力を傾注した大聖者という権威以外に求めることは出来ないのだろうか。

ギリシア語原典の中で記述されているのは、アフロディテ、セメラ、デュオニュソス⁽⁸⁾、オシリス、などギリシア神話やエジプト神話の神々への崇拜に対する論難、エレウシスの秘儀、スパルタの血生臭い風習、ファロス崇拜、カルディアの占星術などに対する論難であり、聖グレゴリオスが非難の対象としているのは、一見して、汎神論的な風土とそれによってもたらされる奇習、多くの場合、血生臭い奇習だったことがわかる。聖グレゴリオスの激しい論難の精神から、私達は一神教を護り通し、それらの血生臭い風習から人々を解放しようと志す強固な護教への意思を読み取ることが出来るだろう。

文献学的な正確さの欠如、神話学的な知識の不足のため生じた事実の歪曲など、このテキストが備える大きな欠陥にもかかわらず、写字生が聖グレゴリオスから受け継いだ最も重要なものはこのキリスト教の護教精神にほかならない。一神教としてのキリスト教の性格を守ることへの堅い意思である。文献としての正確さが損なわれているとしても、汎神論的な風土への挑戦という精神は脈々と受け継がれ、その結実の副産物として、中世ロシア農民の習俗の詳細が克明に書き記された。このテキストにおいては、14・15世紀ロシアの農民習俗に対する細やかな観察に基づく一連の記述が原テキストに挿入されているが、まさにこの挿入箇所ゆえに『聖グレゴリオス講話』は、ガリコフスキー、アーニチコフ、ゼレーニン、ブリュクネル、オルロフ、コマロヴィッチらの文献学者、民俗学者、神話学者らの関心の対象となってきたのである。

このことは多分に逆説的である。聖グレゴリオスから受け継がれた護教精神こそが本テキストにおける最も大きなテキストの変容を引き起こしたのであり、翻訳文献としての質の低下を補って余りある独自の価値を生みだした。原典の翻訳に当たる箇所が往々にして難解で意味が判らなくなるのに対して、こうした挿入箇所は書かれている内容も明晰であり、その記述もおおむね正確で、中世ロシア民衆の生活の断片を伺い知ることの出来る貴重な資料となっている。

ここでは、ペルーン、モコシ、ストーリーボグ、ダージボグなど原書年代記など文献で知られている神格、ウプイリやベレギニャのように近代まで生き残った妖怪妖精、スヴァロジッチ、ヴェレアル、クトン、ベリャ、オビルハ、ペレプルトなど時代とともに忘れ去られた神話的存在が言及されている。その一方で、中世ロシア民衆の宗教生活の根幹をなしていた自然崇拜と祖先崇拜をめぐる様々な儀礼が列挙され、あたかも中世ロシア民衆の異

教儀礼の百科事典のような様相をさえ呈している。宗教儀礼に端緒を持つと考えられる子供の遊びさえ作者の視野に入っている。中世ロシア民衆の風習に触れたこの箇所は、19世紀以降に始まった民俗学資料の蓄積を辿りながら、新たに論じられるテーマであると思われるので、本稿ではこれ以上触れない。

ただ、中世期には文字は教会の専有物だったことについて注意を喚起したい。ロシア中世の教会文献の中では、というより、おしなべて書き言葉そのもののなかで、農民の生活習俗そのものに注意が払われることは全くなかった。唯一の例外が『グレゴリオス講話』のように、異教と認定され、論難の対象となった場合であり、その結果、繰り返して言うが、本テキストの記述は中世ロシア農民の宗教や生活習俗を知る上で重要な資料となったのである。

研究史と研究課題

本テキストの先行研究について触れておきたい。

まず、スズネフスキーが『文書史料に基づく古代ロシア語辞典のための資料』⁽⁹⁾において、パイシイ写本に基づき、用語の採集を行なっている。この資料はソ連科学アカデミーの『11-17世紀ロシア語辞典』⁽¹⁰⁾に受け継がれた。さらに、19世紀後半にチホヌラーヴォフ『ロシア古文書と古美術の年代記 第三巻 第三部』⁽¹¹⁾は画期的な仕事で、ここで、私達が知っている三種のロシア・ヴァリエントが刊行テキストの形になった。チホヌラーヴォフはさらにこの原典となっている『聖グレゴリオス講話』のギリシア語テキスト『聖グレゴリオス講話 第39話 神の光のなかへ』⁽⁷⁾を引いている。さらに、1897年ボノマリョフ『古代ロシア教会教訓文献 第三部』⁽¹²⁾でテキスト校訂を行ない、さらにプスラーエフ『歴史選文集』⁽¹³⁾でその一部が取り上げられた。アーニチコフによれば、ボノマリョフに所収されたテキストよりプスラーエフの採集の方が原写本を反映しているという。

しかし、これらの先行研究を集成して『グレゴリオス講話』ロシア・ヴァリエントのテキストを確定し、さらに、チュードフ・コレクション写本によるプスコフ・ヴァリエントの紹介をも含む本格的な仕事を行なったのはガリコフスキーである。かれは1913年出版された著書『キリスト教会の異教残滓との戦い 第二部』⁽¹⁴⁾においてボノマリョフ、プスラーエフ、チホヌラーヴォフらによる先行研究を集大成し、合わせてテキスト間の字句の比較、新たに発見されたテキスト本稿写本5)によるテキストの紹介などを行なった。

この著書には、本テキストの他にも、ロシア正教会が民衆の異教的な風習に対して何世紀もかけて行なってきた文書による言論活動の成果が集められている。『聖グレゴリオス講話』には20ページ近くが割かれ、テキスト学的な検討とテキストの生成をめぐる若干の考察が行なわれている。1913年版のこの資料の集積をもとに、ガリコフスキーは1916年ハリコフでその理論篇とも言うべき『キリスト教会の異教残滓との戦い 第一部』を上梓した。

さらに1914年全く同じタイプの、そして、ガリコフスキーの業績に劣らず重要な仕事が当時の首都ペテルブルグで出版された。アーニチコフ『異教と古代ロシア』⁽¹⁵⁾である。かれはその中で40ページ以上を割き、主にテキスト学的な分析から、1) - 3)の各写本テキストの(写本ではなく)伝承における影響関係にかなり綿密な考察を加えている。かれ

が各テキストの異同の考察を通じて結論づけたテキスト伝承の系統樹を次に掲げる（図1）。

アーニチコフは、1)・2)・3) 写本間の語句の異同を明らかにしているばかりではなく、その成立に影響を与えたテキスト（『キリストを愛する某者の講話』、『聖金口イオアネス講話』、本『講話』の南スラヴ語ヴァリエント）の存在を指摘し、綿密な考察の対象としたことを始めとして、ほかにも多くの有益な示唆を与えている。アーニチコフによる研究の価値は、全体として捉えたと、『聖グレゴリオス講話』のテキスト生成というテーマに先鞭をつけたものとして極めて高い評価を与えることが出来る。しかしながら、このアーニチコフの優れた研究をもってしても、『聖グレゴリオス講話』テキスト伝承の歴史が決定的に明らかになったわけでは、決していないのである。

まず第一に、アーニチコフは写本間の直線的な影響関係を提示しているが、この想定は適切ではないように思われる。なぜなら、写本間の影響関係の系統樹をつくるためには、5点という写本の点数は決して多い数ではない。語句の異同のみからこれら五点の写本間の関係を直線で結んでしまったならば、伝承されなかった写本が存在する可能性を除外してかかることになる。

さらに、アーニチコフは写本3) キリル・ベルゼルスキー写本 No. 43/1120 (16世紀) テキストと1) パイーシイ文集 (14世紀) テキストとの間に明らかに見て取れる近親性を過小評価し、むしろこれらのテキストの語句の瑣末な差異にこだわって、3) 写本 (16世紀) テキストが写本2) ノヴゴロド・ソフィア・コレクション No. 1285 (15世紀) テキストの影響の元に成立したと主張しているが、この点はかれの考察の中で最も再考を要する点である。

1) 写本と3) 写本が成立年代に200年以上の開きが予想される事実と折り合いをつけようとして、アーニチコフは3) 写本の成立を2) 写本と関連づけて考えることになったのだと思われるが、実際にテキストに当たって再読すれば（アーニチコフの研究では語句の異同のみでテキスト自体は与えられていない）、1) 写本と3) 写本の近親性は明らかであり、3) 写本の成立に与えた2) 写本の役割を1) 写本のそれより大きく評価することは到底出来ないはずなのである。瑣末な語句の異同にこだわり、アーニチコフは木を見て森を見ずの錯誤を犯しているとは言わなくてはなるまい。この点に関しては具体例に当

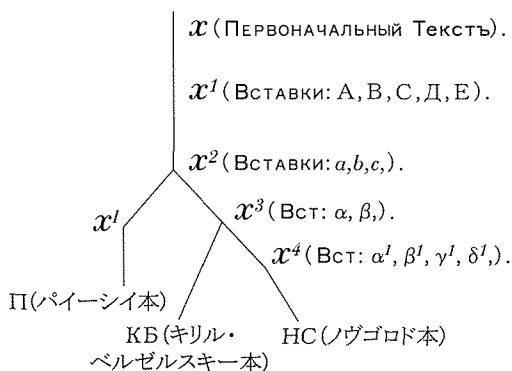


図1

たって後で詳述したいと考えているが、アーニチコフは全般的に直感に頼って結論を急ぎ過ぎる嫌いがある。

ガリコフスキーとアーニチコフの仕事は今日の研究の基礎をつくった点で極めて重要な仕事であり、両研究書の役割は全く古びていない。しかしながら、同時にこれらの先行研究を注意深く検討してみると、以上挙げたようにいくつかの点で難があることも否定できないのである。それらを整理すると次のようになる。

まず、この二つの仕事はほとんど同じ時期に独立して行なわれたものであり、刊行まで両者は互いの研究において知るところがなかったために、成果の突き合わせができなかった。そして、この二人の優れた研究者の成果の突き合わせは今に至るまで行なわれていない。もしも両者の成果の突き合わせができていたら、各々の発見相互に横たわる有機的な連関が見いだされ、『聖グレゴリオス講話』ロシア諸ヴァリアントのテキスト構成の歴史に新たな光が投げ掛けられていたことは確かである。

さらに、ギリシア語原典、南スラヴ・ヴァリアント、南スラヴ起源の注釈本の存在について触れながら、両研究書ともテキスト学的な考察にそれらが十分に活かされていないこと、アーニチコフの著作についてはテキスト学的考察が部分的な考察からテキスト伝承の歴史全体を類推する荒っぽさがあること、ガリコフスキーに関しては写本の略号等に関する知識が当時まだ整備されていなかったため誤記等が多いこと、また、ガリコフスキーは資料集の作成に当たってすべての資料を写本に当たって確認しているわけではないことなどが、そのほかの問題点として挙げられよう。

こうした研究史上の問題を考慮にいれると、今世紀中葉新たに発見されたテキストをも視野にいれて『聖グレゴリオス講話』テキスト伝承の歴史を今一度検討することは、研究上重要な意義を持つと考えられる。以上の理由から、新しく発掘されたテキスト、すなわち、プスコフ・ヴァリアントのテキスト確定と『聖グレゴリオス講話』諸ヴァリアントの生成過程に関する新たな考察が望まれているところであった。本研究はこうした学問的な要請に基づいた試みであることを付記しておく。

— 注 —

- 1 Лихачев, Д. С. *Текстология*, Л., 1983.
- 2 三浦清美「中世ロシアの異教信仰 ロードとロジャニツァについて」『ロシア民話研究 第4号』、1996年、1-39頁。
- 3 上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成2 盛期ギリシア教父』、1992年、330-335頁。
- 3 日本聖書協会『新共同訳聖書』、1987年、345-346頁。
- 4 *Patrologiae graecae tomus XXXVI, petit-montrouge*, 1858, column 335.
- 5 因みに、「ベル」神とは、ヘブライ語のバールと同じく「主」を意味するアッカド語のベールに由来し、バビロンの守護神マルドクの別名である。マルドクはエヌマ・エリシュ神話の中で、蛇または竜として描写されるティアマトと争って勝利し、混沌に秩序をもたらした宇宙の創造神として描かれている。(日本基督教団出版局『新共同訳

旧訳聖書注解Ⅲ続編注解』、429-432 頁)

- 6 “ロードとロジャニツァ信仰”を論難するときにもオシリスが言及されている。筆者はこちらの記述を示唆に富むものと考え、拙論『中世ロシアの異教信仰 ロードとロジャニツァについて』の中で詳しく分析を行なった。
- 7 *Patrologiae graecae tomus XXXVI, Oratio XXXIX* — In sancta Lumina, column 335-360, petit-montrouge, 1858.
- 8 実際には Диомидна であり、女性形となっている。このディオミジアなる女性の神格は無論男性神デュオニュソスではない。むしろそれはデュオニュソスとペアをつくる女性神と考えられるが、ここで詳述はしない。拙論『中世ロシアの異教信仰 ロードとロジャニツァについて』参照。
- 9 *Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам*, СПб., 1893.
- 10 *Словарь русского языка XI-XVII вв.*, М., 1975-.
- 11 Тихонравовъ, Н. С., *Лѣтописи русской литературы и древностей IV, III*, стр. 96-105.
- 12 Пономаревъ, *Памятники древне-русской церковноучительной литературы, вып. III*, 1897 стр. 231-235.
- 13 Буслаевъ, Ф. И., *Историческая хрестоматия*, стр. 528.
- 14 Гальковский, Н. М., *Борьба христианства с остатками язычества в древней руси, т. II*, М., 1913, Т. I, Харьков, 1916.
- 15 Аничков, Е. В., *Язычество и древняя русь*, СПб., 1914.

付録

以下に、写本一覧においてあげたテキストの全文を提示する。本来ならば、参考文献を指定し、読者に参照を願うことに留めるべきであるが、あえて掲載に踏み切った理由は次のごとくである。

これらのテキストが刊本のかたちで世に現われたのは、ガリコフスキーの資料集をのぞけば 19 世紀後半であり、ロシアのしかるべき図書館以外での閲覧は絶望的である。ガリコフスキーの資料集は 1913 年刊行で比較的新しいが、最も稀覯なる刊本であって複写さえできなかった(マイクロフィッシュにする許可は降りた)。後半部で展開する議論の公正を期するためには、これら入手困難なテキストを読者諸賢に提示することは執筆者の義務と考えられる。さらに、後半部での立論や新たな論点の提示にはテキストの全体を見通す必要があり、テキスト自体も比較的短いことから、全文掲載する価値があると判断された。傍線や点線を付すことにより、テキストが何如なる層に分離されるかが明快になったように思う。最も長いテキストは 2) ノヴゴロド本テキストであるが、1) と 3) の傍点・波線・実線の指示を重ね合わせ、注意深く検討すれば諸テキストの構成はわかるはずである。

上記の理由から、資料の提示と紹介を目的とする本稿前半部『資料篇』に掲載することにした。読者のご了解を願う次第である。

1) パイーシイ本によるテキスト

Сло(в)о с(вя)та(г)о Григорья, избобрѣтено в толъцѣх о томъ, како первое погани суще языци, кланялися идоломъ и требы им клали. То нын(ѣ) творят

Видите оканную сию скверненую службу, стваряему от скверныхъ язык елени оканнии Блядивия жертвы ученьемъ дьволимъ избобрѣтено потвореньемъ темнаго бѣса и кощюннаго злымъ кладомы. Зловѣрнии мняще суету истинную, служаще и кланяюще идоломъ нѣкоемъ ухищренье творят. Мы же снхъ, чад(а), отмѣтаемс(я) нечтивыхъ жертвъ, и дыева служенья и кладенья требъ, критьскаго оканнаго учител(я), и Мамеда проклятаго, срациньскаго жерца, еленьския любви, бубеннаго плесканья, свирѣльнаго звука, плясанья сотонина, фружьския слонница, и гусли, мусикѣския, ижи самара е, бесятс(я). Жруще М(а)т(е)ри бѣсовьстѣи Афродитѣ б(о)гинѣ, и Артемидѣ, проклятѣи Деомиссѣ, и недоношенный породѣ, и фивѣское безумное пьянство почитают, яко б(о)га. И семелино требокладенье грому и моланьямъ, и вилу, иже есть былѣ идолѣ, нарицаемыи вилѣ, его же погуби Данилѣ пр(о)р(о)кѣ в Вавилоне. Фали каци же и фюфули. Чтуться срамныя уды и кланяются имъ, и требы имъ кладут. От них же болгаре научившеся от срамныхъ уды истекшую скверну вкушаютъ, рекуще, симъ вкушеньемъ оцѣщаются грѣси. Таверьская дѣторѣзанья идоломъ от первѣнецъ. Лаконьская требищная кров, просяжаемая ранами еюже мажут, Екадью богинию сиюже дѣву вмѣщаются. И Мокашъ чтут, и Малакию велми почитают, рекуще, “буякини”. Пелепеловое темное мясо, имъ же насыщаются б(о)ги, Делфичьская ворожа, или Кастелино запоиство, и волшебная проповѣдъ, наузи смраднии, халдѣйская остроумѣя, и родопочитанье и иеврачьския сны, и чары, извыкше ефроновы скверныя басни и кощюны, митрофа мука. Наричаемая праведная проклятаго Осирита роженѣ, м(а)ти бо его ражающи и того створиша б(о)го(мъ) собѣ, и требы ему силны творяхут оканнии. От тѣхъ извыкоша халдѣи, начаша требы имъ творити великия Роду и рожаницам по роженю проклятаго б(о)га Осира, сего же Осирита скажутъ книги сороциньския, яко не лѣнымъ проходомъ проиде, но смердящим. Того рад(и) сороцини мыют оходѣ. И болгаре, и терканини, холми, откуда извыкоша елени класти требы Артемиду и Артемидѣ, рекше Роду и рожаницѣ. Таци же игуптяне, також и до словенъ доиде се слов. И ти начаша требы класти Роду и рожаницам. Преже Перуна б(о)га нхъ, а переже того клали требу упирем и берегыням. По с(вя)т(е)мъ ж(е) кр(е)щеньи Перуна отринуша, а по х(рист)а б(о)га яшас(я), но и ноне по украинамъ молятс(я) ему проклятому б(о)гу Перуну, и Хорсу, и Мокоши, и Вилу, и то творят отаи. Сего не могутс(я) лишити, проклятаго ставленья в(торы)я трызезы, нареченныя Роду и рожаницам велику прелестъ вѣрным кр(с)тяномъ и на хулу с(вя)т(о)му кр(е)щ(е)нью и на гнѣвъ б(о)гу. А се егуптяне ч(ту)тъ и требы кладут Нилу и огневѣ, рекуще “Нилъ плоддавецъ и раститель класомъ”, огонь творит спорыню сушитъ, и зрѣть того рад(и) оканнии. Полудень чтуть и кланяютс(я), на полѣднь обратившеся. Сижь повѣсть велека есть, но мы лѣности рад(и) от многа мало избрахом.

（破線部はギリシア語原典・南スラヴ語訳に由来する箇所。）

2) ノヴゴ로드本によるテキスト

Сло(во) с(вя)того Григория б(о)гословця изъобрѣтено въ тѣлцѣхъ, о томъ како первое погани суще языци служили идолом и иже иннѣ мнози творять

Видите ли оканьную сию и сквърннюю службу стваряемую от сквърныхъ языкъ елини оканьнии, блядѣвна жертвы ученъемъ дьяволемъ, изъобрѣтено потвореньемъ тѣмного бѣса и кощунамъ злымъ кладомы требы. Зловѣрнии, мняще суету истинною служаще кланяющесе идоламъ. Нѣкое ухыщение бѣсовско творяще. Мы же сихъ, чада, отмыщемся нечтивыя жертвы, дьяволя служения, и критьскаго оканьнаго учителя, Моамеда проклятаго срачиньскаго жерца, и елиньския любве, бубеньнаго плескания, свирилини звуци, плясания сотонина, фряжьскыя слоньница, и гусли мусикия, и замара, иже бѣсятся, жруще м(о)т(е)ри бѣсовьстѣи, Афродитѣ богыни, Корунѣ. Коруна же будетъ и антихристия м(а)ти, и Артемидѣ, проклятѣй Диомиссѣ, стегноражению, и недоношенныи породѣ, и богъмужеженъ, и фивѣиское безумное пьянство почитаютъ, яко бога. И семелино трѣбокладенъе грому и молньи и вилу, б(о)гу вавилоньскому, его же разби Данило пр(о)р(о)къ. Тѣм же б(о)г(а)м требу кладуть и творять и Словеньскыи языкъ виламъ и Мокошѣи дивѣ, Перуну, Хьрсу, Роду и рожаници, упиремъ и берегынѣмъ, и Переплуту, и верьтается пьютъ ему въ розѣхъ, и огнѣви сварожицю молятся. Инавѣмъ, мѣвъ творять. И въ тѣстѣ мосты дѣлаютъ и колодязѣ, и ина многая же утѣхъ фаликады, и въ образъ створены, и кланяются имъ, и требы имъ кладуть. Словѣне же на свадьвахъ, въкладываюче срамоту и чесновитокъ въ вѣдра пьютъ. От фюфильскыхъ же и от аравитьскыхъ писании. Научышесе богларе от срамныхъ удъ истѣкающею сквърну въкшають, и суть всѣхъ языкъ сквърѣише и проклятѣише. Тавьрская дѣторѣзанья, иже от първенѣць. Лаконьская трѣбищная кровь просащаемая ранами, то ихъ епитемья, и тою мажють екатию богыню, сию же д(е)ву творять. И Мокошъ чтуть, и Кыду, и Малакыя, иже есть ручьныи блудъ. Пелепово тѣмное мясотворѣе, иже насыщае б(о)гы, творя е алѣчныи. Ли трипода Дѣлфичьскаго ворожа, и розгометания писаная въ книгахъ. Ли калунстово запонство чѣтуть яко б(о)га. И елиньское волхвованье, и волшебную проповѣдь, и наузы смраднии. От нихъ же никыиже языкъ гоньзнулъ. И халдѣйская астрономия и родопочитанье, иже есть мартолои. И фряжьскыя сны, и чяры, и устрячѣ, и къщъ, ефрѣновы сквърнныя басни, яже и всюда суть. И кощоны Митрофа мука, нарицаемая праведная проклятаго Осирита рожене, мати бо его ражающи okazися. И того створиша б(о)г(о)мъ. И требы ему силны творяху оканьнии. И от тѣхъ извыкоша древле халдѣи и начаша трѣбы творити своима б(о)гома, Роду и рожаници по того роженю проклятаго и сквърннаго б(о)га ихъ Осирита. Того же Осирита скажетъ книга лъживая и сквърнная. Срачиньскаго жьрца, Моамеда, и Бохмита проклятаго, яко нелѣпымъ проходомъ проиде, прожаяся, того ради и б(о)г(о)мъ его нарекоша. Оттолѣ начаша мыти

гузицѣ срацини. И болгаре, и търкмени и олико ихъ есть въ вѣрѣ той, и омытѣ то въливають въ рѣтъ, оттуда же начаша елини ставити трапезу Роду и рожаницямъ. Таже египтяне, таже римляне, даже и до словенѣ доиде. Се же словенѣ начали трапезу ставити Роду и рожаницамъ переже Перуна б(о)га ихъ, а преже того клали требы упиремъ и берегнямъ. По святымъ кр(е)щени Перуна отринуса, а по х(ри)с(т)а б(о)га яшася. Нѣ и ныня по укаинамъ ихъ молятся проклятому б(о)гу ихъ Перуну, Хърсу, и Мокоши, и вилам. Нѣ то творять акы отаи. Сего же не молятся лишити наченше въ поганьствѣ, даже и доселѣ проклятого того ставления вторыя трапезы Роду и рожаницямъ на прѣлестъ вѣрнымъ хр(и)стыномъ и на хулу с(вя)тому кр(е)щению и на гнѣвъ б(о)гу по св(я)тѣмъ кр(е)щени. Череву работни попове уставища трепарь прикладати р(о)ж(е)ства б(о)городици къ рожаницынѣ трапезѣ, отклады дѣюче. Таковии нарицаются кармогузцы, а не раби б(о)жьи. И недѣли д(е)нь и кланяются написавше жену въ ч(ело)в(е)чскъ образъ тварь. Паки же и се и еще египтяне требы кладут Нилу рѣцѣ, и огневи, рѣкуше, “Ниль продавецъ б(о)гъ. И раститель класомъ, а огонь б(о)гъ, егда съхше жито, тогда спорноу творить. Того ради оканьнии полуднье чтуть и кланяются на полъдне обративше. Досюда бесѣда си бысть. Досюдѣ могохъ написати. Даже несоша ны ц(а)рс(твенн)ю г(оро)у, а мы высѣдше изъ корабля. Идохомъ въ с(вя)тую гору. Нѣ то бяше велико слово. Нѣ дотолѣ написахъ.

(下破線がパイーシイ本テキストにも南スラヴ語訳にもない箇所うち二重傍線は『聖金口イオアネス講話』からの引用箇所、下波線がパイーシイ本テキストと内容は同じだが表現が違ふ箇所、下実線がパイーシイ本テキストにはないが南スラヴ語訳にはある箇所。)

3) Кирил・ペрозелсκει本によるテキスト

Слово с(вя)того Григория б(о)гослова изобрѣтено в толчи его. О том, како первое погании языци кланяли ся идолом и требы им приносили

Видите ли окааную сию и скверную службу, створяему от скверныхъ языкъ елини. Окааннии блядивыя жертвы учениемъ диваолим изобрѣтено по творниемъ темнаго бѣса и кошуномъ злымъ кладомы требы. Зловѣрнии мняще суету истинною служще и кланяющиеся идоломъ. Нѣкое ухищрение бѣсовское торяще. Мы ж(е) сихъ, чада, отмещемся неч(е)стивыхъ в ж(е)твѣ, диева служ(е)ння и кладения тебѣ, критскаго уч(и)т(е)ля окааннаго и Маледа проклятого, срачинскаго плескания, свѣрѣлнии звуци, плясання сатанина, фряжския слонница и гусли, мусикиа и замара, ижи бѣсѣются, жруще матери бѣсовствѣи Афронитѣ и богини, Корунѣ и Артемидѣ и проклятѣи Диомисиа, стегноражению и недонощенныи породѣ, и богомужженѣ, и фивѣиское безумие пианственое почитаютъ тако б(о)га. И съмелино требокладение грому и молниамъ и виламъ, иж(е) есть былъ идолъ виль, нарицаемъ его же погуби Данилъ пр(о)р(о)къ в Вавилонѣ. Фали каци же и фафули. Чтоту срамныя уды, и кланяются им, и требы имъ кладуть от нихъ же писании. Болгаре научшеся от срамныхъ удъ истекшую скверну вкушаютъ, рекуще, тако тѣмъ

вкушениемъ учищаются грѣси. Таверскаа дѣторѣзанна идоломъ, иже от первенець. Лаконскаа требищнаа кровь, просажасма ранами, ею же мажутъ Екадию богиню сию ж(е) д(е)ву мѣнятъ. И Мокошь чтутъ, и Малакию, и Килу велми почитаютъ, рекуще, “буакини”. Пелепово темное мясотворение, им же насыщаа идолы, творя их боги. Ли трипода Деличекаго ворожа, ли Касталино запоиство, и волхвование, и волшебнаа проповѣдь, и наузи сѣмраднии, и халдѣискаа острономна. И родопочитання, и фрацскыя сны, и чары, и устряча, и къшь, Ефрѣновы скверныя басни и кощунъ, Митрофа мука. Наричасмаа праведнаа проклятаго ж(е) Осирида, рождение м(а)ти бо его ражающе и оказися, и того сотвориша богомъ и требы ему силны творяху окааннии. От тех же древле извыкше халдѣи, начаша требы творити велики Роду и рожаницамъ по роженію проклятаго и сквернаго б(ог)а Осирида. Того же Осирида скажетъ книга срацинская, яко нелѣпымъ проходомъ проиде смердячимъ. Того ради срачини мыють оходъ. И болгаре, и тѣркмени, и комли, отнуду ж(е) извыноша еллини класти требы Роду и рож(е)ницамъ. Таче египтяне доже и до словенъ доиде. Се ж(е) словени начаша требы класти Роду и роженицамъ. Преж(е) Перуна бога ихъ, а преже тог(о) требы клали упиремъ и берегинямъ. По с(вя)томъ же кр(е)щ(е)нии Перуна отринуса, а по Х(рист)а Б(ог)а яшеся, но иннѣ по украинамъ молятся ему проклятому богу Перуну. Херсу, Молоши, виламъ, и творятъ отанъ. Сего ж(е) не могутъ лишити пролятаго ставлення вторыа трапезы, нареченныа роду и рож(е)ницамъ на велку прелестъ вѣрнымъ хр(и)стианомъ и на хулу с(вя)т(о)му кр(е)щению и на гнѣвъ б(ог)у. Паки ж(е) неще и се египтяне ч(е)сть и требы кладутъ Нили рѣци и огневи, рекуще “Ниль продавецъ и раститель класомъ”, а огонь творятъ, рекуще “спорынню суща егда зрѣетъ”. Того ради окааннии чтоту полудниа и кланяются, на пол д(е)нь обратившеся. Се же повѣс(ть) велика ес(ть), мы же лѣности ради мало написахомъ.

(★下波線がキリル・ペロゼルスキイ本テキスト専有の箇所、★下破線はパイシー本にないが、ノヴゴロド本と共通の箇所。)

4) 『コンスタンチノーブル大主教金口イオアン講話』からの抜粋

.....А друзии б(ог)у Перену, Хурсу, вламъ и Мокоши, упиремъ, и берегинямъ, ихъже нарицають три сѣдмь сестрениць, а инии въ Сварожица вѣрують, и въ Артемиду, имже невѣглаши ч(е)л(ове)чи молятся и куры имъ рѣжють. О убогая кулята, оже не на ч(е)сть с(вя)тымъ породилася, ни на ч(е)сть вѣрнымъ ч(е)л(ове)комъ! Но на жертву идоломъ рѣжються, и то блутивше сами ядятъ. И янѣми въ водахъ потапляемы суть. А друзии къ кладязѣмъ приходяще молятся и въ воду мучють, Вѣмѣару жертву приносяще. А друзии огнѣви и каменію, и рѣкамъ, и источникомъ и бербгынямъ и въ дрова. Не токѣмо преже в поганьствѣ, но мнози и н(ы)нѣ то творятъ. А кр(и)стиане ся наричающеся, мосты и просвѣты и бдѣлники и чересъ огонь скачють. Мнящеся хр(и)стьяны, а поганьская дѣла творятъ: навѣмъ мовъ творятъ, и попелъ посреде сыплють, и проповедающе мяса, молоко, и масла, и янца, и вся потребная бѣсомъ, и на печь льюще въ бани мытися имъ велятъ. Чехолъ и убурусъ вѣшающе въ молвици. Беси же злоумно

ихъ смѣющеся, поропръщуются впелуду томъ и следъ свои показуютъ на прощение имъ. Они же видѣвше то отходятъ, поведаяще другъ другу. И то проповѣданье сами ядятъ и пиятъ. Ихже не достойти ни псомъ ясти. О злыя дияволя прельсть, иже ни поганинъ того не творять. А друзии вѣрують въ Стрибога, Дажьбога, и Переплута, иже вѣртячеса ему пияють в розѣхъ, забывше б(ог)а створившаго н(еб)а и землю и.....Яко Иванъ Златоустый рече. Послушайте.....

5) 影響関係系統図

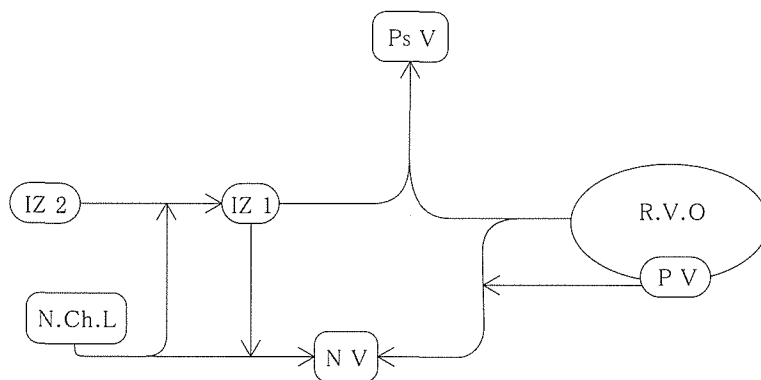


図 2

- PsV= 『聖グレゴリオス講話』 プスコフ・ヴァリアント
 PV= 『聖グレゴリオス講話』 パイーシイ・ヴァリアント
 NV= 『聖グレゴリオス講話』 ノヴゴロド・ヴァリアント
 ROV= 存在が推定される『聖グレゴリオス講話』 ロシア・オリジナル・ヴァリアント
 IZ 1= ノヴゴロド・ソフィア写本 No. 1262 所収『聖金口イオアネス講話』
 IZ 2= 『聖金口イオアネス講話 偽預言者について』
 N. Ch. L= 『キリストを愛する某者の講話』

Текстологическое исследование “Слова св. Григорья, изобрѣтено в толѣцѣх о томѣ, како....” (I)

Киѣхару МИУРА

Настоящая статья состоит из двух частей. Первая половина ее посвящена как остановлению до сих пор никогда не опубликованного текста, так и основательному ознакомлению с содержанием и историей исследования “Слова Григория” и определению характеристики этого “Слова”. Выше упомянутый текст “Слова св. Григорья, изобрѣтено в толѣцѣх о томѣ, како...” найден в рукописном сборнике “Златая Матица”, обнаруженном в 1946 г., и до сих пор никогда не привлекал к себе особого внимания. Во второй половине статьи будет помещен текстологический анализ на основе рассмотрения разночтений всех этих вариантов. Результат этого анализа помещен в конце статьи в виде разветвленной схемы.

Здесь, в этом бюллетене, помещена только первая половина статьи, то есть, ознакомиющая с этими текстами часть. Вторая половина статьи будет опубликована в бюллетене Университета Электрокоммуникаций во второй части в девятом номере.

Еще мы хотели бы добавить, что эта статья в то же время является подготовкой дальнейшей работы настоящего автора, которая заключается в составлении тщательного этнографического комментария к древнерусскому народному быту, упомянутому в этом варианте по сборнику “Златая Матица”.

Среди различной церковной литературы, которая ставила себе задачу обвинения в языческом быте древнерусского народа, найдена заповедь со следующим очень длинным заглавием: “Слово с(вя)того Григория, изобретено въ толѣцѣх его, о том, како пѣрвое погании суще языци кланялися идолом и трѣбы имѣ клали, иже и н(ы)нѣ то творять”.

Григорий, которому приписывается эта заповедь, является святым отцом 4-ого века, одним из трех каппадокийских святых учителей. Он активно боролся с еретиками, стоящими против догмата святой Троицы, в защиту никейского православия. Он оставил сочинения из 243 писем, 507 стихотворений и 45 речей, среди которых самые важные — пять слов о богословии. Оригинальная заповедь, по образцу которой был создан наш древнерусский текст, тоже найдена среди тех 45 речей. Это — 39-ая речь, прочитанная в день Богоявления 381-го года. Но внимательное сравнение древнерусских текстов с греческим оригиналом показывает, что даже считающийся древнейшим и самым близким к оригиналу среди существующих древнерусских текстов уже подвергся существенным изменениям и отошел по содержанию от греческого оригинала. Мы посмотрим дальше, какие именно изменения, точнее, искажения велись в древнерусских вариантах его заповеди.

Но пока мы должны обратить внимание на существование южнославянского перевода той же речи. Его пустил в научный оборот в последней четверти прошлого века Будилович. Тот южнославянский перевод настолько близок к оригиналу, что даже можно его называть буквальным. Конечно, существуют разночтения с оригиналом св. Григория, но они ограничиваются следующими примерами. В южнославянском переводе иногда игнорировались детали древнегреческой мифологии, о которых переводчик, видимо, не имел никакого понятия.

Приведем пример. Цитируем следующие фразы из греческого оригинала и южнославянского перевода и сравниваем: *“τελοῦντες τῇ μητρὶ τῶν θεῶν καὶ τελοῦμενοι, ὅσα τῇ μητρὶ τῶν τοιοῦτων εἰκὸς, οὐδε κὼρη τις ἡωὶν ἀρπάζεται καὶ Δημήτηρ πλάνεται”* = “жруще м(а)т(е)ри б(о)жьстѣи ни д(е)ва нам въсхытается”. Перевод очевидно направлен к упрощению. Так и собственные имена древнегреческих богинь Коры и Деметры пропускаются в южнославянском переводе.

Кроме таких ничтожных изменений, расстояние между греческим оригиналом и южнославянским переводом возможно назвать почти нулем. Вот этот факт, в свою очередь, показывает, что между южнославянским переводом и русскими вариантами существует кой-какой разрыв. Теперь пора нам перейти к текстам древнерусского происхождения. Сначала посмотрим историю исследования.

В рукописной традиции древней Руси до сих пор обнаружен этот текст в пяти рукописях (1) Паисиев Сборник, Собрание Кириллобелозерского монастыря №4/1081 14в. 40–43об 2) Новгородское Софийское собрание №1285, 15в., 84об–87 3) Собрание Кириллобелозерского монастыря №43/1120, 128об–130, 16в. 4) Сборник “Златая Матница” НСРК 1946г. 35/2F. 15в., 145–148 5) Чудовское собрание №270, 221–224

Из них четыре давно опубликовали уже в прошлом столетии в трудах Тихонравова “Лѣтописи русской литературы и древностей IV, III” и три еще раз повторены Гальковском в десятых годах нашего века в его сборнике собранных из широко разбросанных рукописей материалов под заглавием “Борьба христианства с остатками язычества в древней руси т. II (СПб., 1913)”. Кроме вышеуказанных двух ученых включили это древнерусское сочинение в состав своих хрестоматий Буслаев и Пономарев.

Спустя несколько лет им опубликован первый выпуск той же книги, посвященной попытке теоретического анализа язычества древней Руси на основе материалов того же сборника. Почти одновременно был издан другой немаловажный труд выдающегося русского ученого Аничкова, посвященный тоже народной языческой традиции древней Руси.

Время опубликования этих двух “синтетических” работ совпадает в разных славянских странах, естественно в том числе в России, с периодом серьезных научных интересов к языческой мифологии славянских народов, которые продолжали появляться на протяжении всего девятнадцатого века. Кроме сочинений двух выше упомянутых ученых, мы могли бы назвать имена Л. Нидерле, Л. Янко, Х. Махал, Л. Леже в качестве таких же

серьезных ученых, которые внесли незаменимый вклад в область гуманитарных наук.

В науке тогда считалось, что главные ее интересы уже отошли от поиска текстов в рукописях и перешли на сферу рассмотрений и интерпретаций их содержаний. Поэтому до сих пор никогда не привлекал к себе за собой особого внимания заново найденный текст рукописного сборника 15-го века названного “Златая Матица”, который обнаружили при археографической экспедиции Пушкинского Дома в 1946 г., возглавляемой величайшим археографом Малышевым.

Принимая во внимание выше указанный ход исследования, мы поставили себе целью выдвинуть наш новый текст “Слова Григория” в научный оборот. В первой половине статьи, помещенной в этом бюллетене, еще перед нами стоит задача определить характеристику древнерусских текстов в целом. Сам текст по “Златой Матице” помещен в начале первой половины этой статьи с переводом на японский язык и разночтением с Чудовским вариантом.

В заключении коротко сделаем обзорные характеристики русских вариантов по конкретным примерам. Мы уже обратили внимание на то, что даже в южнославянском переводе иногда сокращаются детали греческой мифологии. Такая же тенденция сохраняется в русских вариантах.

Например, фраза “стегнорождение = рождение от бедра” сократилась в Паисиевом варианте. Здесь идет речь на самом деле о рождении Диониса, но автор-переписчик наверно не понял ту мифологическую деталь. Но интереснее следующий пример. Здесь текст не сокращается, а прибавляется.

Во всех вариантах этого слова есть следующая фраза: “И Мокошь чтуть, и Малакию, Килу вѣльми почитают, рекущи “Буяныни.”” Малакия здесь чем-нибудь сходным с Мокошью. То есть, она считается божеством. Но на самом деле в греческом и южнославянском текстах эту часть соответствует следующая фраза: “Οἱ γὰρ αὐτοὶ καὶ μαλακίαν ἐτίμησαν καὶ θρᾶσύτητα ἐσεβάσθησαν” = “тиже бо и малакию чтоша и буюсть почтоша”. Она оказалась совсем далеко от какого-либо божества, а она, по существу, мыслительное представление “изнеженность”.

Вот это самое типичное отклонение от оригинального текста. Кроме этого, из-за самовольной интерпретации “переводчика” перепутались мифологическое существо Ветхого Завета “Бел” и южнославянские духи “Вилы”. И притом здесь неправильное понимание двойное. “Переводчик” считает Бела убитым пророком Даниилом змеем. Но на самом деле Даниил уничтожал Бела и змея, то есть, Бел не змей, а идол.

Такие же изменения и вставки в результате самостоятельной и, в данном случае, самовольной писательской деятельности “переводчика” до такой степени изменил вид оригинала, что это обновившееся и обрусевшее сочинение уже невозможно называть переводом.

Но несмотря на такие филологические неточности и искажения фактов из-за недостатка знаний мифологических деталей древней Греции и Ветхого Завета, авторы

древнерусских вариантов унаследовали от святого Григория одну важную черту. Это верность христианской вере, то есть, непоколебимая решимость защитить характер единобожия христианства. Это означает, что присутствие филологических неточностей в переводе не ведет к снижению ценности этого сочинения. Древнерусские авторы прочно унаследовали от святого Григория твердый дух отказа от ментальностей языческого многобожия, и в процессе проявления этого духа вписались в текст многочисленные языческие детали русских древностей, которые сделали это сочинение бесценным.

Положение порадоксальное. Получилось так, что единственное наследие от святого 4-ого века принесло в сочинение самые принципиальные изменения, то есть, вставки упомянувшие подробности языческого быта древнерусского народа.

Во вставках упоминаются такие известные нам в древнерусской письменности языческие боги, как Перун, Мокошь, Стрибог, Дажбог, и дожившие до нашего времени мифологические существа, как упыри, берегини, попутник, лесной бог, и забытые с течением времени божества, как Сварожичи, Кутн, Бея, Обилуха, Ядрей, Переплут и Спех. Далее здесь перечисляются обряды скоренившиеся в культах предков и природных предметов. Эти вставки служат исключительным в древнерусской письменности непосредственным свидетельством о народных языческих религиозных чувствах.